

第1回 日本ジオパーク委員会議事録(案)

日時: 2008年5月28日(水) 10:00~12:00

場所: 産総研 秋葉原事業所 大会議室(1101室内)

出席者:

委員(五十音順、敬称略)

NPO 法人 防災情報機構 会長(元 NHK 解説員)	伊藤和明
京都大学 総長	尾池和夫
産業技術総合研究所地質調査総合センター 代表	加藤碩一
東京学芸大学 教授	小泉武栄
(財)国立公園協会 理事長	鹿野久男
(社)全国地質調査業協会連合会 会長	瀬古一郎
日本地質学会(早稲田大学教授)	高木秀雄
日本地震学会(時事通信)	中川和之
日本火山学会(東京大学地震研究所教授)	中田節也
日本第四紀学会(東京都立大学名誉教授)	町田 洋
日本地理学会(首都大学東京教授)	松本 淳

オブザーバ(敬称略)

外務省広報文化交流部国際文化協力室 室長	齊藤 純
外務省広報文化交流部国際文化協力室 事務官	古川忠雄
外務省広報文化交流部国際文化協力室 事務官	濱田 幸
文部科学省国際統括官付 ユネスコ協力官	秋山和男
文化庁文化財部記念物課 主任文化財調査官	桂 雄三
文化庁文化財部記念物課 課長補佐	柿澤雄二
農林水産省農村振興企画部資源課 課長補佐	長田実也
林野庁森林整備部計画課 企画班森林計画官	小口陽介
林野庁国有林野部経営企画課 森林施業調整官	善行 宏
経済産業省知的基盤課 課長	中山隆志
経済産業省知的基盤課 課長補佐	永田邦博
国土交通省総合政策局観光資源課 企画係長	松岡 良
国土交通省総合政策局観光資源課 企画係	渡邊大輔
環境省自然環境局国立公園課 課長補佐	則久雅司

事務局

事務局長	産業技術総合研究所	佃 栄吉
副事務局長	産業技術総合研究所	脇田浩二
	産業技術総合研究所	渡辺真人
	産業技術総合研究所	牧野雅彦
	産業技術総合研究所	吉川敏之
	産業技術総合研究所	原 英俊

プレス3名

[はじめに]

1. 挨拶

日本ジオパーク委員会の発足に際し、佃事務局長から挨拶があった。また、外務省齋藤国際文化協力室長から、ユネスコ松浦晃一郎事務局長のメッセージが紹介され、日本は世界遺産に目を向けている傾向が強いが、ジオパークも推進するべきであり、今回この委員会が立ち上がることにに関して「日本のジオパークが世界にアピールできることは喜ばしい。」との励ましをいただいた。

2. 各委員の紹介

事務局(脇田)から五十音順に紹介した。また、オブザーバ参加の省庁を紹介した。

3. 委員長および副委員長の選出

委員の互選により、委員長に京都大学総長の尾池和夫氏、副委員長に東京都立大学名誉教授の町田 洋氏が選出された。

[報告]

1. 日本ジオパーク委員会の説明

事務局(吉川)から「日本ジオパーク委員会会則(資料 2)」の説明があり、委員の任期、委員会の採決の方法(多数決)など委員会の取り決めが確認された。また、第二回以降の一般傍聴や記者会見については、事前に取り決めることとした。なお、議事録は原則公開とする。

日本ジオパーク委員会会則の文章に誤字が指摘され、訂正されることになった(召集→招集)。

2. ジオパーク活動の経緯・現状

事務局(渡辺)から、ジオパークに関する基礎情報として、ジオパークの経緯、海外の実例、日本の現状などについて、プロジェクターを使用して紹介された。日本におけるジオパークの組織・体制についても説明された。

[審議]

1. 申請候補選定の手続き・審査の基準・応募要領

事務局(渡辺)から、本委員会ですべて実際に作業することになる審査や応募の手順について説明があった(資料 4~9 使用)。

2. 質疑応答

3. 自由討論

事務局からの説明に続いて、委員による活発な議論が交わされた。主な議論は以下の通りである。

1) 世界ジオパークの基準

世界ジオパークについては、ユネスコのガイドラインに従う。ただし、世界ジオパークの評価基準には、日本の実状に合わない(安定大陸的な)ものがある。世界ジオパークネットワーク(以下 GGN)にはジオパークがない国は加盟できないので、現状では公の場で直接改善を求めることはできない。GGN の現審査員に接触するなど、非公式なアプローチを続ける。

2) 日本独自のジオパーク認定基準

日本ジオパークに関しては、日本独自の認定基準を設けることも可能であるし、将来はそう

すべき。ただし、6月上旬に募集開始予定と時間がないので、今回は GGN に準じた申請書とし、前文としてその旨を説明する。申請と同時に地域からの要望も出してもらうことも検討する。特に日本の場合は火山が多いこともあるので、安全・防災は重要である。

3) 日本ジオパークの認定方針

日本独自のジオパークについては、認定方針を確認しておく必要がある。すなわち、どのくらいの数を集めるのか、質を優先するか数を優先するかなど、委員の共通理解が必要。あまり数が少ないと、事業として盛り上がらないとは予想されるが、「日本でのジオに対する意識を高めたい」というのが理念であるならば、質を妥協すべきではない。「世界ジオパークを目指す資質がある」というのはひとつの目安か。また、ジオパークの場合は認定後も見直し(再審査)されることになっているので、将来にわたって一定の質を維持することは可能と思われる。

4) 審査プロセス

各地域からの申請に対し、審査するには現地の状況をできるだけ知りたい。書面だけの審査よりもプレゼンテーションを聞いた方が良く、できれば現地を視察するのが望ましい。GGN の場合は現地審査がある(申請地域が負担)。ただし、視察にかかる予算の問題を検討する必要がある。将来的には、日本ジオパークネットワーク(以下 JGN)が設立され、そこから依頼を受けて視察という方法が可能になると期待される。

5) 募集

事務局では募集の広報手段として日本ジオパーク連絡協議会経由とウェブ発信を考えている。このほか、大学の地学系のネットワークや地学ガイドを擁する自治体などへ発信する手段もある。募集時期が迫っているので、至急応募要領を仕上げる必要がある。また、自己評価表には、「自然公園(日本では法律に基づく独自の定義がある)」など修正を要する語句がある。

6) その他

- ・中国のジオパーク申請書の例を見たいという意見に対して個人的に頼むなど、模索してみる。
- ・日本の中にはジオパークとしてふさわしい地域が幾つもあるが、ジオパークを目指す活動がないところも多いので、ジオパークの更なる広報・宣伝も必要。
- ・日本におけるジオパークの体制を確立するには、NPO 法人地質情報整備活用機構(GUPI)を強化し、育てて行く必要がある。交流の機会があるとよい。
- ・候補地域の取り組み状況を集約してはどうか。事務局へ情報を集め、委員で共有するようになりたい。
- ・委員会のウェブページを整備し、議事録公開の場ともする。
- ・委員会のメーリングリストを整備する。

[その他]

1. 委員長総括

2. 次回以降の予定確認

次回の委員会は9月4日午後の開催とし、時間と場所は後日案内する。具体的な審査に時間がかかることが予想される。6月の世界ジオパーク会議報告等は、委員会より前にメールで済ませ、審議時間をなるべく長くとれるようにする。また、日本ジオパーク認定の独自基準についても議題とすることになった。

[配布資料]

資料 1 日本ジオパーク委員会委員一覧

資料 2 日本ジオパーク委員会会則

資料 3 ジオパーク活動の経緯と現状

資料 4 日本におけるジオパーク関係機関の組織図

資料 5 ガイドライン

資料 6 自己評価表

資料 7 応募・審査の流れ

資料 8 応募要領

資料 9 ノルウェーの申請書の例

資料 10 今後のスケジュール